

## 小特集 人文科学とコンピュータ研究を支える資料を考える—MLA の立場から—

岡部晋典<sup>†</sup> 福島幸宏<sup>††</sup> 村田良二<sup>†††</sup> 後藤 真<sup>††††</sup>

人文科学研究には当然ながらさまざまな資料を必要とする。コンピュータを応用した研究もその例外ではない。この小特集セッションでは、人文科学とコンピュータに関わる研究の基礎となる資料について、それを扱う諸機関の現状と資料の特性を確認すると同時に、人文科学とコンピュータ研究への効果的な活用方法や、これら諸機関ではどのようなデジタル化が望まれているのかを再確認したい。

### Consider of Research materials of “Computer and Humanities” –from Museum, library, and Archives

Yukinori Okabe<sup>†</sup> Yukihiro Fukushima<sup>††</sup>  
Ryoji Murata<sup>†††</sup> Makoto Goto<sup>††††</sup>

In this special session, we discuss about the research materials becoming basic of "the computer and the humanities study". We discuss the characteristic of the research materials of the museum, library and archives. In addition, We argue the effective usage to the humanities and a computer study. And we consider what we expect design of digitization at the museum, library and archives.

<sup>†</sup> 千里金蘭大学 (Senri Kinran University)

<sup>††</sup> 京都府立総合資料館 (Kyoto Prefectural Library and Archives)

<sup>†††</sup> 東京国立博物館 (Tokyo National Museum)

<sup>††††</sup> 花園大学 (Hanazono University)

### 1. 問題の所在

情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会は、「デジタルアーカイブ」を発足当初より主要な課題として掲げてきた[1]。この用語が、主要な課題となった理由には、人文科学に関わるコンピュータを応用した研究を行うために、まずデータの多くの蓄積が重要であることを強く意識したものであった側面がある。多くの資料をデジタル化し、蓄積することで、次の解析へのステップを踏むことが可能であるという方向性がそこからは読み取れる。ここで対象とするデータとは、無論人文科学で用いるための「資料」のことで、博物館 (M) であれば、主に物質的側面に注目した諸資料群、図書館 (L) であれば、知識情報の集積たる書籍、アーカイブズ (A) であれば、主に紙資料 (史料) である古文書・公文書などである。分野により表現やその指すところに差異はあるものの、人文科学の研究のもっとも基礎となる「資料」のデジタル化は、人文科学とコンピュータ研究会が行ってきた主たる課題であった。その後、「デジタルアーカイブ」の用語は、文化庁による推進もあいまって、(功罪含め) 多くの場で用いられる言葉として定着した (a)。

「デジタルアーカイブ」研究の一例としては、インターネット時代の幕開けにともない、早くから「データの爆発」を予測し、いち早く横断検索の重要性を述べ、デジタル資源の効果的な活用を行うための「アーカイブ」の必要性を述べたものなどがある [2]。

これらの「デジタルアーカイブ」研究の重要な成果の一つとして、人間文化研究機構の統合検索 (b) がある。統合検索は、国立国会図書館デジタルアーカイブポータル (PORTA (c)) と接続すると同時に、近年発展の目覚ましい、時空港情報による統合・解析の可能性までも取り入れ (d)、デジタル資源を見つけ出すための効果的なツールとなっている。また、アジア歴史資料センターや、東京国立博物館などの事例は言うまでもなく、多くの人文科学を支える資料群がデジタル化され、人文科学研究の進展に貢献している。

しかし、これらの成果の一方、課題もないわけではない。

ひとつは、人文科学を支える諸資料をもつ機関のデジタル技術を介した連携である。2009年より「日本の MLA 連携の方向性を探るラウンドテーブル (e)」という、博物

a なお、人文科学とコンピュータ研究会で「デジタルアーカイブ」を中心テーマにすえることは、2005年を最後になくなっていく。これは、デジタルアーカイブから「人文情報学」などの一つの学問分野への飛躍を目指していることも関わっているであろう。

b <http://humanist.nijl.ac.jp/GlobalFinder/cgi/Start.exe>

c <http://porta.ndl.go.jp/>

d GT-Map GT-Time <http://www.chikyu.ac.jp/nihudb/gt-tools/>

e 知的資源イニシアティブ (IRI) フォーラム <http://www.iri-net.org/>

館・図書館・アーカイブズの諸機関の連携のありようが議論される会議が行われている。第3回にいたりそのキーワードに「デジタル・コンテンツ」が出てきているのは注目されるべきであろう。本来、有機的な連携をもつべき諸機関が連携されず、別個に資料の保存・活用の議論を、そしてデジタル化の議論を行ってきた現状がある。これらの諸資料を効果的に結び付ける最良の解は、少なくとも現時点ではデジタル技術の活用であるのは間違いないのである。

無論、これらの連携を行うための技術そのものはある程度「出揃って」おり、実際に必要なのは運用であるといえる。しかし、これら諸機関の連携一とりわけ資料情報を連携させようとするためには、資料の特性と、それらの資料が扱われる目的に合致した技術の作成・選定を行う必要性はいまだに減っていない。さらに、実際の運用にともなう、諸課題（権利・法的課題・予算措置のバランス）も、技術の問題と切り離すことは難しい。これらを解決することは、資料のデジタル化研究の次のステップであろう。

次に国立の諸機関と、地域の諸機関のバランスの課題がある。国立の諸機関は、自らの諸資料を「デジタルアーカイブ」化し、資料情報の公開へと着実に歩を進めている。一方、都道府県以下、地方自治体の多くの資料保存機関では、デジタル化の濃淡に差がある。館によっては、いまだに資料の目録情報すら公開されず、どのような資料を持っているのか、自らの価値を（少なくとも web 上において）明らかにできない館が存在しているのも、また現実である。

本来、これらの地域資料、いささか「古風」な言い方をすればロングテールのな資料を拾い上げるのは、デジタル技術に期待された部分であったはずである。しかし、現在のクラウド技術をもってしても、これらの地域資料の拾い上げは、（少なくとも現時点では）「成功」していない。

こちら、MLA 連携と同様、資料の特性と発見の目的にあわせた設計・予算・権利の問題などの解決があるといえる。

## 2. 将来に向けて

「デジタルアーカイブ」の成果と課題をうけて、人文科学とコンピュータ研究会では「アーカイブズ」の課題を過去に二度扱ってきた [3] [4]。

そこで、今回の小特集セッションでは、周辺の議論の進展も受け、さらに対象を広げ、博物館 (M)・図書館 (L)・アーカイブズ (A) の現場で働く気鋭の諸氏をお招きし、議論を行うこととしたい。

たとえば、上記にあげた課題群が、すでに技術的には解決している課題なのであれば、何がその先を阻んでいるのか。その阻むものを超えるために必要なのは、より高度な技術なのか、それとも人文科学者の側が一義的に解決しなければならないものなのか。

また、資料の特性に合わせた技術的設計は（設計そのものを行わないという選択肢まで含めて）どのように行うべきなのか。もしくは、資料の構造そのものではなく資料「発見の目的」に即した際、どのようなニーズがあるのか。このようなポイントを中心に議論し、提言していただくことを目指している。

この議論を通じ、人文科学とコンピュータ研究を支える資料とそのデジタル化の問題が幾分でも整理され、次のステップへと進むきっかけになれば幸いである。

## 3. 講演者プロフィール

今回、招待した講演者3名のプロフィールは以下のとおりである。また、フロアからの積極的なご発言も期待したい

### 岡部晋典（千里金蘭大学現代社会学部）

図書館情報学、メディア論。司書課程科目の担当講師。学部時代から一貫して図書館情報学と、科学哲学者のカール・ポパーとの関係を研究。日本図書館情報学会、日本社会情報学会 (JSIS)、情報メディア学会など、人文社会情報学寄りの情報とメディアにかかわる領域の学会に所属。最近の専らの関心は図書館のコレクション形成や MLA 連携。著作に図書館情報リテラシー教本（共著）など。

### 福島幸宏（京都府立総合資料館歴史資料課主任）

日本近現代史、アーカイブズ。京都府の公文書である京都府行政文書（一部は重要文化財）の管理・運営を担当。アーカイブズ機関の全国団体である全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）の調査・研究委員。日本歴史学協会文化財保護特別委員会委員（陵墓担当）など。地域資料の保存、アーカイブズ機関の運営、MLA 連携など、文化行政全体に関心をもつ。著作は『青野原俘虜収容所の世界』（共著、山川出版社、2007年）「郡役所の廃止と文書整理—京都府内の郡役所を例として—」（『京都府行政文書を中心とした近代行政文書の史料学的研究』、科研報告書、2008）「京都府行政文書の重要文化財指定と課題」（『アーカイブズ』36号、2009）ほか。

**村田良二（東京国立博物館 学芸企画部博物館情報課情報管理室長）**

博物館情報学。所蔵品データベースをはじめとする館内情報システムの設計、開発を手がける。主な関心領域は、美術館・博物館における所蔵資料を中心とした情報の組織化や管理、メタデータの設計・標準化および相互運用。アート・ドキュメンテーション学会国際交流委員長。著作に『MLA 連携の現状・課題・将来』（水谷長志編、共著、勉誠出版社、2010）がある。

司会：後藤真（花園大学）

### 参考文献

- 1) 『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』1999～2010（情報処理学会、1999年～2010年）を参照
- 2) 原正一郎「人文科学研究資源の共有化～国文学研究資料館を例として～」(『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』2000、情報処理学会)
- 3) 牟田昌平「国立公文書館のデジタルアーカイブ：過去の記録から未来の記憶へ」、鈴木卓治・五島敏芳・牟田昌平「アーカイブズとデジタル技術の未来を考える」(パネルディスカッション) (『人文科学とコンピュータ』研究報告 77、情報処理学会、2008年)
- 4) 五島敏芳「デジタルアーカイブにおける永久保存」、鈴木卓治・五島敏芳「パネル討論「アーカイブズとデジタル技術の未来を考える」(2)」(『人文科学とコンピュータ』研究報告 79、情報処理学会、2008年)